

ヨハネの手紙第三「兄弟を受け入れる者、拒む者」

1A 受け入れる者 1-8

1B 愛されたガイオ 1-2

2B 真理のうちの歩み 3-4

3B よそから来た人たちの受け入れ 5-8

2A 拒む者 9-15

1B 悪ではなく、善の見習い 9-12

1C かしらになりたがる者 9-11

2C 人々からの証し 12

2B 直接の話し合い 13-15

本文

ヨハネの手紙第三を開いてください。私たちは、ヨハネの第一の手紙、そして第二の手紙を読みました。前回の第二の手紙で、真理のうちに歩んでいることを喜んでいる、ヨハネがいました。第三の手紙も同じです。ガイオという人に手紙を書いています。彼が真理に歩んでいることを喜んでいます。しかし、前回の第二の手紙では、真理に歩んでいない者たち、反キリストとヨハネが呼んでいる偽教師たちが、集会にやって来る時に、家の中に入れてはいけないと、婦人に注意を与えています。反キリストの霊を見分けること、そして家の教会の管理者として、そうした人々を交わりの中に入れていないことを読みました。

第三の手紙では、その反対です。真理のうちに歩んでいる人々を、自分がかしらになりたがっている、受け入れない人がいるので、それを悪い行いとして見習わないように注意しています。真理のうちに歩むということは、同じように真理のうちに歩んでいる人々を受け入れることに他なりません。真理に属している兄弟を、あたかも自分の仲間ではないかのように排除することが、いかに間違っているのかについて学んでいきます。

1A 受け入れる者 1-8

1B 愛されたガイオ 1-2

¹長老から、愛するガイオへ。私はあなたを本当に愛しています。

ヨハネは、第二の手紙と同様に、自身を「長老」と呼んでいます。そう呼ぶ資格が十分すぎるほどありますね。十二使徒の最後の生き残りです。他の使徒たちは殉教で、天に召されています。年齢的にも90歳ぐらいになっていると思われます。

そして、「ガイオ」であります。使徒の働きやパウロの手紙には、ガイオという名の者が出て来ていますが、それぞれ異なる人物です。ですから、ここのガイオが他の箇所のガイオであることにはなりません。ローマの中では、ありふれた名前でありました。

大事なのは、彼を、ヨハネが愛していることです。「本当に愛しています」とヨハネが言っています。第二の手紙の婦人に対しても、同じように言っていました。新改訳はこう訳していますが、共同訳では、「真理の内に愛しています」と訳されています。こちらのほうが、誤解されなくてよいでしょう。真理のうちに歩んでいることを、第二の手紙の婦人にも、第三の手紙のガイオにも、ほめているからです。真理のうちにいる者たちには、愛があるのです。同じ神から生まれ、真理の御霊を受けており、神が愛なので、互いに愛しているのです。私たちも、同じ真理のうちにいるということだけで、愛し合う仲でありたいです。

² 愛する者よ。あなたのたましいが幸いを得ているように、あなたがすべての点で幸いを得、また健康であるように祈ります。

ここの「幸い」は、元々の意味は「良い旅でありますように」というものです。そこから、「ご健勝を祈ります」という挨拶に使われる言葉になりました。

たましいには、すでに「幸い」をガイオは得ています。「エペ 1:3 私たちの主イエス・キリストの父である神がほめたたえられますように。神はキリストにあって、天上にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。」ここのパウロの言葉のように、霊的祝福を、すでにガイオは受けています。ヨハネは、それだけでなく、すべての点で幸いであり、健康であることを祈っています。

ここの言葉「幸い」を英語では prosper と訳されていて、「繁栄」という意味になっています。そして、偽りの教え、繁栄神学とも言いますが、あなたがたがお金持ちになることを神は願われていると教える人々がいます。偽の教えです。けれども、ヨハネはガイオが、生活のいろいろな面で幸いを得て、身体的にも健かであることを願っています。それは、これから読めば分かりますが、彼は教会において、すばらしい働きをしており、よそから来た福音の働き人を受け入れて、宿泊から食事、そして送り出すための費用も用意するなど、金銭的、経済的にもあらゆる犠牲を払っています。それは、ある程度の経済的基盤がなければ、できないことです。そして身体的にも、健康でなければできないことです。主の働きに豊かな人々に、このような幸い、健やかさを祈ることは、みこころにかなっています。

2B 真理のうちの歩み 3-4

³ 兄弟たちがやって来ては、あなたが真理に歩んでいることを証してくれるので、私は大いに喜

んでいます。実際、あなたは真理のうちに歩んでいます。

お話ししましたように、当時の教会は、一つ一つの集まりが家で行われるなど、小規模であり、福音のため、みことばのための奉仕者は流動的に動いていました。巡回する人々が多かったのです。ヨハネの下で訓練を受けた人々や、ヨハネと関りのある働き人が、ガイオの管理する教会にも行ってきて、良い報告をヨハネに持ってきました。その良い報告とは、「あなたが真理に歩んでいる」ということです。キリストこそが真理であり、この方に倣って歩んでいるということです。このことを、彼らだけでなく、ヨハネが事実、確かにそうだと認めています。

第一の手紙でたくさん学びましたが、言っていることと、歩んでいることは違います。神を知っていると言いながら、神の命令を守っていなければ、その人は偽っているということばを、私たちは繰り返し、第一の手紙で聞きました。ガイオは、真理を語っているだけでなく、その中に歩んでいました。私たちが、真理をであるみことばを聞き、それを受け入れている中で、何とかして、知恵を尽くし、力を尽くして、聖霊の力によって歩みの中に生かされていくことを祈ります。

⁴ 私にとって、自分の子どもたちが真理のうちに歩んでいることを聞くこと以上の大きな喜びはありません。

第二の手紙でも、婦人の子どもたち、つまり、婦人の働きによって、真理の中を歩んでいる人々がいることを知って、大いに喜んでいるとありました。ここでも同じです。ガイオの働きによって、イエスを信じて、たしかに真理の中を歩んでいる人々がいるのを知ることほど、大きな喜びはありません。これは、主の働きに従事しているすべての人が、抱いている喜びでしょう。

多くの労苦があり、苦しみがあり、犠牲があったとしても、自分が信仰に導いた人々が、真理の中を歩んでいるのを見れば、すべてが報われたと感じます。事実、主が戻ってこられる時に、自分の報いとなるのです。パウロが、こう言いました。「I テサ 2:19-20 私たちの主イエスが再び来られるとき、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠となるのは、いったいだれでしょうか。あなたがたではありませんか。あなたがたこそ私たちの栄光であり、喜びなのです。」

ところで、この手紙は、他の手紙や福音書と同じように、黙示録が書き記された頃に書かれています。ヨハネが流刑のためパトモス島にいましたが、その時にイエスご自身からの啓示を受けました。そして、教会の迫害者、皇帝ドミティアヌスが死んだので、パトモス島からエペソに戻ることができました。そして、黙示録を書き記したものを、七つの教会に回覧させています。主が語られた、それら七つの教会の姿を見ますと、いかに真理から離れていつてしまっているのかを明らかにされます。もう主が天に昇られてから 60 年経っていますから、容易に想像できます。そして、反キリストたち、グノーシス系の異端が大勢います。そういった背景を考えますと、真理のうちに歩んでい

る者たちがいるということ自体が、大きな喜びなのです。

3B よそから来た人たちの受け入れ 5-6

そうした中で、同じ、真理のうちに歩んでいる者たちが、真実と行いをもって互いに愛し合うことは、これまで以上に大切です。

⁵ 愛する者よ。あなたは、兄弟たちのための、それもよそから来た人たちのための働きを忠実にしています。⁶ 彼らは教会の集まりで、あなたの愛について証しました。あなたが彼らを、神にふさわしい仕方で送り出してくれるなら、それは立派な行いです。

「よそから来た人たちのための働き」とヨハネが言っています。他の、使徒パウロの手紙においても、頻繁に働き人が行き来している様子が分かります。その時に、実際的な課題があります。それは、宿泊です。ローマ時代における宿は、環境が劣悪でした。不衛生だし、風紀も乱れ、淫行も平気で行われていました。したがって、旅人をもてなすことは、今、考える以上に非常に必要なことだったのです。ですから、大きな負担ではあるのですが、それをガイオは愛をもって、喜んで行っていました。そこで、その兄弟たちがヨハネのところで、ガイオの愛を証したのです。

そして、ガイオはそれを忠実にいったと、ヨハネはほめています。これは、ただ受け入れただけでなく、次に遣わされるどころまで、送り出すところまで彼は犠牲を払っていました。

⁷ 彼らは御名のために、異邦人からは何も受けずに出て行ったのです。

巡回する人々が、主の働きをするために必要な金銭はとても限られていたことでしょう。ですから、不本意ながら、神を信じていない人々に金銭的に拠り頼むという現実もあったのでしょう。それは、仕事をしながらそうしていることもあれば、神を信じていないのに受け取ることもあったかもしれません。ある伝道集会で、チャック・スミス牧師は献金の呼びかけを頼まれることがありました。その時は必ず、伝道で連れられてきたクリスチャンではない人たちのことを意識して、「クリスチャンが、献げるものです」と強調したそうです。このように、異邦人から受け取ることが起こってしまうような状況があるのに、ガイオはしっかりと支援したのだと思われれます。

⁸ 私たちはこのような人々を受け入れるべきです。そうすれば、私たちは真理のために働く同労者となれます。

真理の中を歩んでいる人々を、いろいろな働きをしても、受け入れていくべきだというのが、使徒の教えていることです。真理のうちに歩んでいるといっても、そこには、主のいろいろな恵みの現れがあります。「I コリ 12:4-7 さて、賜物はいろいろありますが、与える方は同じ御霊です。

奉仕はいろいろありますが、仕える相手は同じ主です。働きはいろいろありますが、同じ神がすべての人の中で、すべての働きをなさいます。皆の益となるために、一人ひとりに御霊の現れが与えられているのです。」そうした、いろいろな働きに私たちは心を広く、開いているべきです。」

そして、大事なのは、「そうすれば、私たちは真理のために働く同労者となれます。」という部分です。自分が、福音の真理を直接伝えていなかったとしても、伝えている人を、伝えているという理由だけで支援するのは、まさに主の前では同労者とみなされます。主が言われました、「マタ 10:42 まことに、あなたがたに言います。わたしの弟子だからということで、この小さい者たちの一人に一杯の冷たい水でも飲ませる人は、決して報いを失うことはありません。」

2A 拒む者 9-15

1B 悪ではなく、善の見習い 9-12

1C かしらになりたがる者 9-11

⁹ 私は教会に少しばかり書き送りましたが、彼らの中でかしらになりたがっているディオテレペスが、私たちを受け入れません。

ここの「教会」が、ガイオの属する教会なのか、他の教会なのか意見が分かれませんが、ヨハネはガイオに、ディオテレペスについては注意してほしいことを告げるために、以前も少し手紙を書き送ったけれども、改めて書いていることが分かります。パウロも、テモテには具体的な名を出して注意喚起している文を書いています（Ⅰテモ 1:20、Ⅱテモ 4:14 など）。これは、教会の指導的な働きをしている人々の間では、取り交わされる情報です。教会の秩序や平安に関わるからです。

そして、午前礼拝で話していましたが、教会でよくあることです。かしらになりたがる、ということですね。まず、教会は、主イエス・キリストの教会です。主がペテロに、彼が天の御国の鍵を与えと言われて、教会の指導者になることを宣言されましたが、教会自体はご自身のものだと宣言しています。「マタ 16:18 そこで、わたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。よみの門もそれに打ち勝つことはできません。」

キリストがかしらであり、すべての人はこの方からだであると言われていています。すべてが、かしらなるキリストにつながって、各部分がたがいつながって、結び合わさせ、この方に向かって成長しています。ですから、指導をする賜物が与えられている人々も、あくまでも神の家族の中でも兄弟です。ヨハネも、福音の働きのために教会を廻っている人々を、「兄弟たち」と呼んでいますね。

ところが、時を経ると、いつの間にかここが自分自身の所有であるかのような錯覚をします。神の恵みによって、賜物によって任されているだけなのに、自分自身によって保っていると思込みます。パウロが、コリントの人々に、「Ⅰコリ 4:7 いったいだれが、あなたをほかの人よりもすぐれ

ていると認めるのですか。あなたには、何か、人からもらわなかったものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。」と言いました。すべて受けたものなのに、どうしてもらっていないかのように誇るのか？ということです。

そこで、人の罪、欲望である、「高ぶり」が芽を出します。サタンは、高ぶりによって罪を犯しましたが、高ぶって、自分こそがかしらであると思うのです。その高ぶりが、兄弟たちを受け入れないという行為に走らせます。なぜなら、自分が恵みを受けていないからです。へりくだることしか、神の恵みを受け取ることができません。そして、恵みを受けていないので、恵みを受けて、恵みによって立っている人がうらやましくなり、妬むのです。神の恵みの支配が入って来るのを、妨げようとします。それで、兄弟たちを受け入れないのです。

¹⁰ ですから、私が行ったなら、彼のしている行為を指摘するつもりです。彼は意地悪なことばで私たちをののしっています。それでも満足せず、兄弟たちを受け入れないばかりか、受け入れたいと思う人たちの邪魔をし、教会から追い出しています。

そして、恵みを受けて、恵みによって立っている人を引き落とすことによるのみ、自分が高いことができます。午前礼拝で話したように、自分がかしらになりたいから、なんていうことは決して言いません。いかにも、霊的に聞こえる言葉、霊的詐欺と呼んでいいかなと思いますが、偽りのことばで、人々をだまして、自分に引き寄せようとします。なので、使徒ヨハネや、使徒ヨハネから遣わされている人々について、意地悪なことばしかかけられないのです。

それから、「それでも満足せず」と行っていますね。かしらになりたいというのは、欲望ですから、欲望は満たせば満たすほど、もっと欲しいとねだります。肉の欲望については、少し上げれば収まるだろうと思っていたら、決してそんなことはありません。御霊によって、殺すしかないのです。それで、「兄弟たちを受け入れないばかりか、受け入れたいと思う人たちの邪魔をし、教会から追い出しています」と言っています。なんと、受け入れようとしている人々を追い出しているのです。

¹¹ 愛する者よ。悪を見習わないで、善を見習いなさい。善を行う者は神から出た者であり、悪を行う者は神を見たことがない者です。

この人物、「ディオテレペス」が、ガイオと同じ教会の人物か、そうでないかは意見が分かれます。どちらにしても、ガイオにもかなりの圧迫がかかっているのですが、もし同じ教会の人であれば、相当の心理的圧迫がかかっているでしょう。その圧に耐えて、悪ではなく善を見習っていく決断を取っていかねばいけません。

その理由を、ヨハネは明白に言っています。「善を行う者は神から出た者であり、悪を行う者は神

を見たことがない者です。」こういった出来事はしばしば、「人間模様」と呼ばれて、英語だと「ドラマ」と言われます。お家騒動、あるいは、ごたごたですね。けれども、教会においては、はっきりしています。善が行われている時、それは神から来ていて、神がおられるのです。悪が行われている時、神が見えなくなります。神を見ていないので、平気で悪を行えるのです。

教会の至上命題は何でしょうか？聖霊の宮と、パウロは呼びます。神殿の建物が、今や、御霊によって私たち自身に、神が宿ってくださいます。そこでの至上命題は、「神のご臨在にあずかる恵みを受け、この方の栄光を見る。」ことです。人間のドラマではなく、神がここにおられるか、おられないのか？という死活問題なのです。

このような人間ドラマが起こると、どちらの側に付くのか？と私たちは思ってしまいます。ドラマを見ている、どちらに共感するのかを見定めて、それで自分が応援する人を決めて、話の展開を見守って、はらはらどきどきするのです。けれども、それを教会でやってはいけません！人間的な尺度の正否の問題ではないのです。善は神から出て、悪は、神を見てもいないから行えるのです。神がおられるのか、そうでないのかが試されているのです。その人に、確かに神がおられることの証しがあれば、その人についていくのではなく、神について、それでその人を助けるのです。それが、善を見習うことです。

2C 人々からの証し 12

¹² デメトリオについては、すべての人たちが、また真理そのものが証ししています。私たちも証します。私たちの証しが真実であることは、あなたも知っています。

デメトリオについてですが、おそらくは、この第三の手紙をヨハネから預かって、ガイオに私にきた兄弟だと思えます。使徒パウロも手紙を書いた時にそうでしたが、いろいろな人の推薦をして、特に手紙を携えている人を敬うようにという言葉を書いています。例えば、ローマ人への手紙を、ケンクレアから持ってきたフィベを、ローマの教会の人々に推薦しています。「16:1-2 私たちの姉妹で、ケンクレアにある教会の奉仕者であるフィベを、あなたがたに推薦します。どうか、聖徒にふさわしく、主にあつて彼女を歓迎し、あなたがたの助けが必要であれば、どんなことでも助けてあげてください。彼女は、多くの人々の支援者で、私自身の支援者でもあるのです。」

そこで大事なのが、評判が良いかどうかは大きな尺度です。すべての人たちが、彼を証しているとのこと。それから、真理そのものが証ししていると言っていますが、彼の歩みに真理が現れています。彼が真理の中を歩んでいるので、だれの推薦がなかったとしても、その真理がヨハネの心に、神を知っていると証しているのです。

そして、「私たちの証しが真実であることは、あなたも知っています」と言っていますが、これは高

ぶって行っている言葉ではなく、御霊による証しのことを話しています。使徒ヨハネや彼らの信じていることは、それぞれが与えられている御霊によって、真理であることが証しされているということです。だから、無理やり人の説得で信じ込ませているような、洗脳ではなく、御霊がそう教えているので、使徒たちの証しが真理であることを、私たちも知っているのです。

2B 直接の話し合い 13-15

¹³あなたに書き送るべきことがたくさんありますが、墨と筆で書きたくありません。¹⁴近いうちにあなたに会いたいと思います。そうしたら、直接話し合いましょう。

第二の手紙で、婦人に語ったように、ガイオにも話しています。墨と筆で書きたくないと言っていますね。顔と顔を合わせて会って話すことで、そこに喜びがあります。

そして、直接会うことは、それだけ信頼関係があります。コラの反乱においては、モーセとアロンが来なさいと言っても、反抗している人々は会いもしませんでした。そして、意地悪なことばを人づてで伝えているだけです。今も昔も変わりませんね。メールやLINE、ネットで悪いことを語っている人は、直接会おうといっても、会おうとしません。自分がやましいことをしていることが、直接会うことによって明らかにされてしまうからです。

それから、直接会うことによって、書面では話きれない機微なことも、伝えることができます。墨と筆は、大切な伝達手段ですが、直接会えるのであれば、直接会うことの方がはるかに伝えることができます。

¹⁵平安があなたにありますように。友人たちが、あなたによろしくと言っています。そちらの友人たち一人ひとりによろしく伝えてください。

平安が、私たちの間に結ばれる実です。そして、挨拶ですが、ヨハネの友人たちがよろしくと言って、またガイオの友人たちにもよろしく伝えてくださいと言っています。互いに挨拶している中で、その友情を確認しているわけです。私たちも、信仰にある友、そこにある責任関係を大切にしていきたいものです。